



Title	人文科学系論文の「先行研究の章」におけるメタディスコース
Author(s)	小森, 万里
Citation	日本語・日本文化. 2021, 48, p. 1-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79311
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

人文科学系論文の「先行研究の章」における メタディスコース

小森 万里

1. はじめに

アカデミック・ライティング（以下、AW）における先行研究の扱いは重要であり、石黒（2012）が述べているようにその扱いの不適切さによって当該論文が不採択になることもある。特に、人文科学系論文では当該論文の意義づけのために先行研究の詳細な検討を行う課題設定再起型の論文も多く（大島他 2010）、論文内で一定量の記述が求められるため、注意深く書く必要がある。しかし、上級日本語学習者であっても先行研究を適切に扱って書くことは難しく、筆者が担当する上級日本語学習者による AW においても、先行研究の羅列になっている、先行研究に対する書き手の評価がない、レポートや論文の内容とうまくかみ合っていない、問題提起や研究目的につながる書き方になっていないなどの課題がみられる。これは、山本（2016）が認識上の問題があると述べているように、AW における先行研究の位置づけについて学習者が理解できていないという要因も考えられるが、理解できていてもそれを日本語で効果的に表現できていないという要因もあるのではないと思われる。

では、日本語母語話者は先行研究を扱う章を論文全体の中でどのように位置づけ、どのような語彙・表現によって読み手に示しているのだろうか。本研究では日本語学習者のための AW 教育に生かすために、日本語母語話者による先行研究を扱う章の位置づけと使用表現、それによる読み手への配慮をメタディスコース（以下、MD）の使用状況の検討によって明らかにする。

2. 先行研究

2.1 なぜ MD を扱うのか

坪根・田中（2015）は、流れを明示的に示す言語形式の使用が構成の良さを感じさせる大きな要因となっているとし、AW におけるメタ言語の使用の重要性を述べている。AW におけるメタ言語とは「本文の内容とは直接関係のない、文章の展開を理解しやすくするような機能を持つ表現や説明のこと（田中・阿部 2014）」であり、これらが効果的に使用されているかどうかがマクロ構成の明確さに関わるとされている。このように、メタ言語は読み手の負担を減らすための対人的配慮の一方法であると考えられる。

一方、AW において読み手に配慮して行う行為にはメタ言語によって文章の流れを示す以外にも、他のテキストに言及して前提となる知識を共有する、言い換えや定義や例示によって書き手の意図を読み手に確認させる、読み手が受け入れやすいような方法で書き手の主張を述べるなど様々なものがある。本稿ではこのように書き手が読み手に対して行っている多様な対人的配慮の全体を扱うために、MD という概念（Hyland 1996, 1998, 2005）を援用する。

MD とはコミュニケーションを促進し、書き手の立場をサポートし、受け手との関係を築くための重要な手段である（Hyland 1998）。特に、AW における MD は使用されるアカデミック・コミュニティによって、その使用のしかたが決まっているとされる。つまり、MD は書き手が自由に選択して使用できるのではなく当該のコミュニティの中で語用論的に決まっているものであるため、特に AW 初心者はそのルールを学ぶ必要があると考えられる。

MD には、書き手の望む解釈やゴールに読み手を導く機能をもつ *Interactive metadiscourse*（以下、*Interactive*）と、読み手をテキストに関与させる機能をもつ *Interactional metadiscourse*（以下、*Interactional*）がある（Hyland 2005）。*Interactive* と *Interactional* の下位分類を表 1 に示す。表内の各 MD の名称（下線部）の日本語訳は小島（2017）による。また、表内の各 MD の説明の訳文は筆者によるものである。

表1 Hyland (2005) のMDの下位分類

Interactive	Interactional
<u>連結</u> (Transition markers) : 主節間の関係を示す	<u>譲歩</u> (Hedges) : 命題に対するコミットメントを保留し、対話をオープンにする
<u>文構造</u> (Frame markers) : 談話行動、議論の順序、段階などを示す	<u>強調</u> (Boosters) : 書き手が述べていることが確実だとし、対話を閉じる
<u>内部照応</u> (Endophoric markers) : テキスト内の他の部分の情報に言及する	<u>評価・態度</u> (Attitude markers) : 命題内容に対する書き手の態度を表す
<u>引用</u> (Evidentials) : 他のテキストの情報に言及する	<u>一人称</u> (Self mentions) : 書き手自身について言及する
<u>例示・言い換え</u> (Code glosses) : 命題の意味を精緻化する	<u>関与</u> (Engagement markers) : 読み手との関係を明示的に構築する

2.2 AWにおける引用に関する先行研究

学習者の引用の問題については山本 (2016)、楊 (2017) などがある。山本 (2016) はAW初心者へのインタビューを行い、先行研究の引用部では引用した理由や自身の研究テーマとの関連付けについて表現する必要はないと考えているなど認識上の問題があり、それが予期せぬ剽窃につながる場合もあることを指摘している。また、楊 (2017) は日本語学習者によるAWの引用使用の傾向を調査し、①引用密度が低い、②信頼性の低い引用元や出典不明の引用元が少なくない、③間接引用を多用する、④注・文献番号のみでの引用が多い、⑤「述べる」の多用と引用動詞の過去形が目立つ、⑥序論に引用を多く使用するなどの問題点を指摘している。この指摘から、学習者の課題として、引用の目的や認識 (①、⑥)、引用元の信用性 (②)、引用表現などの形式面 (③～⑤) に関わるものがあることが示唆される。

このうち引用の形式面については文章構造の検討も含め、すでに多くの研究がなされている。例えば、山本・二通 (2015) は人文・社会科学系論文における引用・解釈に関わる文を分類し、それぞれの機能や典型的な論理展開パターンを示

している。また、清水（2009）は人文系論文における引用文の表現方法について、生天目・大島（2018）や大島（2009、2019）は資料分析型論文における資料の引用と解釈の部分に頻出する表現や語彙、談話展開について述べ、指導のための提案をしている。

以上のように、学習者にとっての引用の問題点や日本語母語話者による引用表現の使用パターンなどについての研究は発展してきているが、山本（2016）や楊（2017）にみられるような認識上の問題点の解決には、引用表現の使用や引用の際の文章構造という点だけでなく、先行研究を扱う章が論文全体の中でどのような機能を果たす章なのかという位置づけと、その位置づけを読み手に理解してもらうためにどのような表現が使用されるのかという点も学習者に示す必要があるのではないと思われる。本研究ではその位置づけと読み手への配慮を表す一つの手段として MD に注目する。

2.3 AW における MD に関する先行研究

AW における MD については中谷（2019）や小森（2020）がある。中谷（2019）は経済・経営国際ジャーナルに掲載された論文のイントロダクションの章から各ムーヴにおける特徴語を抽出してその位置と具体例を検証し、査読者に読みやすいイントロダクションの構築には MD の有効な使用が必要であると述べている。小森（2020）は、論文の冒頭章で使用される MD には①読み手に論文の全体像を把握させる機能をもつ文構造マーカーと②後続する章の議論に読み手がついていけるようテーマに関する問題点や注目すべき点を示して議論の土台を作る機能をもつ引用マーカー、譲歩マーカー、評価・態度マーカーがあること、さらに連結マーカーが冒頭章内での段階の移行を示し読み手を導いていることを述べており、中谷（2019）と同様、冒頭章の構築には MD の使用が有効であることが示唆されている。

本稿では先行研究を扱う章が論文全体の中でどのような機能をもつものとして位置づけられ、それらの機能をどのような MD が担っているのか、それによって読み手に対しどのような配慮をしているのかを明らかにすることを目的とする。

3. 調査方法

近年コーパスを使用した量的分析が多用されている。コーパス調査は大規模な調査により全体的な傾向を示すことができる点が長所であるが、形態的指標に明確に表れるものでなければ処理が困難であるという短所もある（石黒 2013）。本研究は特定の言語形式に注目するわけではないため、データの量を制限して網羅的に分析・考察するという手法をとることにした。

2.1 に述べたように、MD はアカデミック・コミュニティによって使用のしかたが異なるため、本調査では人文科学系の中でも日本語教育学の分野に絞り、佐藤他（2013）でこの分野において 70% を占めるとされる「実験 / 調査型」論文を調査対象とする。学会名鑑で 1000 人以上の会員をもつ学会誌『日本語教育』に掲載された「実験 / 調査型」論文のうち、2013 年～2015 年の一般投稿論文（特集論文、寄稿論文は除く）で、日本語母語話者によって書かれた 15 編を対象とし、この分野の論文での先行研究を扱う章の流れと、各論文に共通してみられる MD について出現箇所と用法および読み手への配慮について考察した。MD の判定については、Hyland（2005）の定義を援用した。

4. 「先行研究の章」の流れ

本研究では、章のタイトルが「先行研究」「先行研究と本研究の目的」「本研究の対象と目的」などとなっており、研究対象に関する先行研究と書き手の論文の目的や位置づけなどが書かれた章や節を「先行研究の章」と呼ぶ。

「先行研究の章」の流れを調査するために各文の内容をコーディングしたところ、「当該章の行動予告」「先行研究の検討」「先行研究の評価」「研究目的の提示」という 4 段階で章が成り立っていることがわかった。さらに各段階を下位分類したところ、第 2 段階の「先行研究の検討」は＜先行研究の存在紹介＞＜先行研究の内容紹介＞＜先行研究に対する解釈＞＜研究対象の説明・検討＞＜研究対象の定義＞に、第 3 段階の「先行研究の評価」は＜先行研究の問題点指摘＞＜研究の意義説明＞のカテゴリーに分けられた。また、これらのカテゴリーは調査対象論文のすべてに出現した必須カテゴリーもあれば一部の論文にのみ出現した任意のカテゴリーもあった（表 2）。以下、各段階がどのような段階であるかにつ

いて述べる。

第1段階は、当該章において何を説明するのかを読み手に対して予告し、章の全体像を示す段階である。第1段階は必須カテゴリーではなく、第2段階から「先行研究の章」が始まる場合もある。

第2段階は、先行研究の検討を行い、当該論文における議論の前提を整える段階である。まず研究テーマに関する先行研究にどのようなものがあるかについての紹介（2a-1）や、先行研究でどのようなことが明らかにされているかについての紹介（2a-2）を行い、次に紹介した先行研究に対して書き手の解釈（2a-3）を述べる。ここでの書き手の解釈とは、先行研究の内容について書き手による

言い換えや要約などを「と考えられる」「と言える」「これらは～ものである」などの表現とともに述べることを指す。また、研究対象が先行研究でどのように説明され、どのように捉えられてきているのかについて述べ（2b-1）、書き手の研究における研究対象の範囲を決定したり定義したりする（2b-2）場合もある。

第3段階は、第2段階で紹介した先行研究に対する書き手の評価を述べ、読み手に対し当該論文を読む必要性を示す段階である。先行研究の問題点やまだ明らかにできていない点を指摘するほか（3-1）、書き手の研究の意義や研究の可能性を表す場合もある（3-2）。

第4段階は後続章の流れを予告し、論文の全体像を示す段階である。第3段階で指摘した先行研究の問題点について、その解決を当該論文で行うことを研究目的の提示という形で述べ（4-1）、さらに研究目的を明らかにするための具体的な

表2 「先行研究の章」の段階

段階	カテゴリー
1	(当該章の行動予告)*
2	先行研究の検討
2a-1	(先行研究の存在紹介)
2a-2	先行研究の内容紹介
2a-3	先行研究に対する解釈
2b-1	(研究対象の説明・検討)
2b-2	(研究対象の定義)
3	先行研究の評価
3-1	先行研究の問題点指摘
3-2	(研究の意義説明)
4	研究目的の提示
4-1	研究目的の提示
4-2	(研究課題の提示)

※マル括弧は任意のカテゴリーである。

研究課題を示す (4-2) こともある。

5. MD の出現状況

各段階がどのように MD を使用して章を成立させているかをみるために、MD の出現状況を調査した。

5.1 Interactive の使用状況

本節ではテキスト全体を通して読み手を導いていく機能をもつ Interactive が「先行研究の章」の中でどのように使用されているかをみる。調査対象論文 15 編における Interactive の出現数と使用者数は表 3 の通りであった。

表 3 Interactive の出現数と使用者数

下位分類	出現数	使用者数
連結マーカー	123	14
文構造マーカー	44	15
内部照応マーカー	30	11
引用マーカー	134	15
例示・言い換えマーカー	31	11

連結マーカー、文構造マーカー、引用マーカーはほぼ全ての書き手が使用しており、出現数も多く、その点では冒頭章と同様の結果である。また、内部照応マーカーと例示・言い換えマーカーも 15 人中 11 人の書き手が使用しており、一定以上の出現数がある。このようにすべての種類の Interactive が多用されることは「先行研究の章」の特徴の 1 つであると考えられる。

5.1.1 連結マーカーの使用状況

主節間の関係を表す連結マーカーの使用状況は表 4 の通りである。以下、半数以上の書き手が使用していた追加、逆接、順接、対比の 4 種類を取り上げ、典型的な出現段階の早い種類から順に、出現箇所、用法、読み手配慮について述べる。

表4 「先行研究の章」における連結マーカースの使用状況

種類	典型的な 出現段階	表現	出現数	使用者数
追加	2a-2,2a-3, 2b-1, 3-1	また、加えて、他にも、この他	28	12
逆接	3-1	しかし	19	11
順接	4-1	そこで、そのため(行動)、そうさせないために	12	11
対比	2a-2	一方、{これら/それ}に対して、しかし{その一方で/その反面}、ところが	14	8
因果関係	2a-2,2a-3, 2b-1	そのため(経緯)、その結果、これは～ためである、なぜなら～からである	13	7
帰結	2a-3	以上{〇のように/から/のことから/の点から総合的に判断して/をまとめると}	9	6
並列	4-2	そして、さらに、それに加えて、同様に	7	5
まとめ	2a-3	このこと{から/から予想される結果として/により}、{この/ここからわかる}のように、したがって	9	4
転換	2b-3	では	3	3
補足	2b-2	ただし、なお	3	2
列举	2a-2	まず、次に	2	2
言い換え	2a-2	のである	1	I

5.1.1.1 追加を表す連結マーカの使用状況

「また」「加えて」「他にも」「この他」など情報の追加を表す連結マーカは最も出現数が多く使用者数も多い。中でも「また」(23例)が最も出現数が多く、出現箇所は先行研究の内容紹介、先行研究の解釈、先行研究への評価、研究対象の説明・検討など2a-2、2a-3、2b-1、3-1段階内で情報を追加する箇所で使用されている。また、前文が先行研究の紹介であれば後文も先行研究の紹介、前文が先行研究の評価であれば後文も先行研究の評価というように、文の内容が同じ種類のものを接続している。情報の追加がさらに続く場合は「他にも」「この他」が使用されていた(例文中の下線は筆者による)。

- ① ここから分かるように、単語が語義として評価の意味を持っている場合もあれば、単語が持つ特定の意味が拡張されて評価を表す場合もある。また、社会言語学的な観点からは、室山(2001)が、社会規範から逸脱した性格や日ごろの振舞い、人柄等を評価的に表す一群の語彙を方言性向語彙と呼び、分析している。他にも、一部のモダリティ表現も、否定的評価を表す際に用いられるとされている(高梨2010)。(関崎2013)【先行研究の紹介の追加】

このように、「また」や「他にも」等の決まった位置での使用は、当該コミュニティの中でのMDについての共有知識であると考えられる。「先行研究の章」におけるこれらのマーカの使用は、読み手に後続部分の内容の予測を促し、当該章の流れの中を読み手が迷わずに読み進めることに寄与すると考えられる。

5.1.1.2 対比を表す連結マーカの使用状況

次に、「一方」「これらに対して」「しかしその一方で」など対比を表す連結マーカについて述べる。いずれも2a-2段階において先行研究の内容を紹介する文で使用されている。

用法は2つある。1つ目は、「一方」「これらに対して」「それに対して」が助詞「は」と共起し、別の観点からの先行研究の紹介や異なる立場の先行研究の紹

介を対比的に示すものである。2つ目は、「しかしその一方で」「しかしその反面」「ところが」によって、前文に矛盾する内容の追加や否定的情報の追加など読み手の予測に反する内容を付加する用法である。

- ② 中西（2012）は学習者コーパスにおける「極限」「ぼかし」の「も」の出現率が、母語話者のそれと比べて有意に少ないことを指摘している。一方、中俣（2010）はないと不自然に感じる「も」の不使用は「同類」に集中するということを指摘している。（中俣 2013）【異なる立場の先行研究の提示】
- ③ 砂川（1989）は「単一事態型の引用文」について、引用句との共起が必須の引用動詞が用いられている例1）aのような文を基本型として位置付けている。しかしその一方で、引用動詞以外の述部動詞を用いている b,c,d の引用文も「一つの事態」を言い表しているとして「単一事態型」に含め、発話行為論の視点から分析している。（山本・二通 2015）【前の文脈に矛盾する内容の提示】

このように、対比の連結マーカ―は追加の連結マーカ―と同様に情報の追加を行うことができ、読み手に対して追加する情報の内容を予測させることができる。対比と追加の連結マーカ―を効果的に使用することが学習者の AW における「先行研究の羅列」という問題点の解決につながる可能性がある。

5.1.1.3 逆接の連結マーカ―の使用状況

次に 3-1 段階で出現する逆接の連結マーカ―「しかし」について述べる。19 例中 18 例が 3-1 段階の先行研究の問題点の指摘をする文に使用されており、読み手に対して段階の移行を明確に示すマーカ―になっている。

- ④ 先行研究では「極限」「ぼかし」の「も」についても触れられているが、この論文ではより問題を引き起こしやすい同類の「も」に焦点を絞ることとする。先行研究の結果からは（中略）「A も B も P」は中国語で副詞で

ある「也」を2つ重ねて使うことはできないという性質から、特に困難であると考えられる。

しかし、先行研究は対照研究からの予測や、コーパスの出現例による分析に留まっているため、実際に課題を用いた検証を行うとともに、理解レベルで困難があるのか、産出レベルで困難があるのかという点を明らかにする必要がある。(中俣 2013)【先行研究の紹介→先行研究の解釈→しかし→先行研究の評価】

このように、「しかし」が先行研究の評価を行う第3段階への移行を示すマーカーとして使用されている点は冒頭章での「しかし」と同様である(小森 2020)が、「先行研究の章」では、追加や対比の連結マーカーを使用しながら先行研究の詳細な検討を行い、従来の研究からどのような知見が得られているのかを示した上で、従来の研究における問題点を指摘し、書き手の研究がその問題点を解決するものであることを示すという流れで書く必要がある。問題点の指摘という否定的な内容の提示には、「しかし」と共起する譲歩マーカーや評価・態度マーカーの使用にも注意を向ける必要があるが、それについては5.2で詳述する。

5.1.1.4 順接を表す連結マーカーの使用状況

順接の連結マーカーは、いずれも第4段階の研究目的を述べる箇所で使用され、研究目的・研究課題の提示、必要な研究行動の提示、必要な視点の提示を行う文に使用されており、読み手に対して第4段階への移行を示すマーカーになっているとわかる。

用法は2つある。1つ目は、第3段階で先行研究の評価をした後、第4段階に入って研究目的・研究課題の提示を行う用法で、「そこで/そのため、本研究では～する/した」という形式を使用する。2つ目は、第3段階で先行研究の評価をした後、第4段階に入って必要な視点の提示を行う用法で「そこで/そうさせないために～必要がある/重要である」という形式が使用される。

- ⑤ そこで本研究では文法性判断課題、翻訳課題、作文課題の3種の調査を通じて、母語との対応の有無によって同類を表す「も」構文の難易度が変化することを検証する。（中俣 2013）【研究目的の提示】
- ⑥ そこで本研究では、CNS にとって習得が困難とされる和語動詞の産出面について日本語習熟度を考慮して検討する必要があると考える。（森山 2015）【必要な視点の提示】

以上、個々の連結マーカの使用状況を見てきた。「先行研究の章」の段階の流れに沿ってまとめると、第1段階で章全体の予告をした後、第2段階で追加や対比の連結マーカによって情報の追加を行い、当該論文に必要な先行研究の紹介と解釈を行う。次に第3段階への移行を「しかし」によって表し、書き手による先行研究の評価を述べる。さらに第4段階への移行を順接の連結マーカによって示し、研究目的の提示を行うという流れになっている。このように連結マーカの決まった位置での使用は「先行研究の章」の各段階を特徴づけ、章の流れを読み手にわかりやすく示すと同時に、当該論文の前提となる知識を読み手と共有し、後続章の議論を行う土台を作っていると考えられる。

5.1.2 文構造マーカの使用状況

談話行動や議論の段階などを示す文構造マーカの使用状況は表5の通りである。

表5 文構造マーカの使用状況

用法	典型的な 出現段階	表現	出現数	使用者数
研究目的 の提示	4-1	本研究では/においては～を検証する、目指した、明らかにする、など	24	13
節内容の 予告	1	ここ/【節】では～に関する先行研究を見る/を確認する/～について述べる	4	3
理論的枠 組みの設 定	2b-2	本稿では～を理論的枠組みとする、本研究では～という概念を用いてとらえる、など	4	2
研究対象の 範囲の設定	2b-2	この論文では～に焦点を絞る、本研究の対象は～である	2	2
研究対象 に対する 解釈	2b-3	～に関する先行研究を概観すると～、本稿では～と位置づける	2	2
研究課題 提示の予告	4-2	次の～点を研究課題とする、リサーチクエスチョンは以下の通りである。	2	2
その他	2b-1, 2b-2	〈研究対象についての調査結果提示予告〉以下に～を挙げる、〈研究の観点の提示〉本稿では～に着目する、〈定義の予告〉本研究では～を次のように定義する、など	6	5

文構造マーカとして最も多く使用されているのは4-1段階に出現する「研究目的の提示」である。使用文型としては以下a～cの3種が挙げられる。

- a. 行動の提示：「本研究では～を検証する/分析する/目指す/明らかにする/比較する」

- b. 行動と行動の目的の提示「～をもとに～を分析し、考察を行う。それにより～を示す」「～を参照して～を分析し、～ことを目的とする。」
- c. 疑問の提示：「～のか、～を明らかにする / 示す / 考える」

その他、多くの書き手が使用しているわけではないが、第1段階での節内容の予告、2b-2 ～ 2b-3 段階での理論的枠組みの設定や研究対象範囲の設定、研究対象に対する書き手の解釈、4-2 段階での研究課題の提示などに使用することにより、書き手の行動や議論の順序・段階などを示している。

冒頭章の文構造マーカーは、論文全体の目的や論文の展開を読み手に対して示すことによって論文の全体像を把握させる機能を果たす（小森 2020）が、「先行研究の章」では、議論を進める上で必要となるより詳細な枠組みの設定、研究対象の明確化、研究目的の再確認とそれを具体的に実現するための研究課題の提示を行うマーカーとなっていることがわかる。これにより、読み手に議論の前提知識を共有させることができ、また後続章の内容を予測・推測しながら読ませることにつながる。AW 教育の現場では、冒頭章で示した研究目的をそのまま繰り返せばよいのではなく、より具体的で詳細な研究行動の提示を行うために文構造マーカーのバリエーションを示す必要があるだろう。

5.1.3 引用マーカーの使用状況

引用マーカーは主に「先行研究の章」の第2～第3段階で使用されている。詳細は表6の通りである。

表6 引用マーカーの使用状況

用法	典型的な 出現段階	文型(例)	出現数	使用者数
先行研究の 内容紹介	2a-2	Xでは～と{指摘されている/結論づけられている}、Xによると～という、Xは～として～3点を挙げている、など	72	14 [*]
先行研究が 行ったこと の提示	2a-2	Xは以下の仮説を立てている、Xが～を分析している、Xは～を検討したものである、など	11	7
先行研究の 評価	3-1	近年ではXなどもあるがXの研究は～については触れていない、Xは～を明らかにしているがそこに～の視点は見られない、など	8	7
先行研究の 存在紹介	2a-1	～に関する先行研究にはXがある、～の分野でもXが～に関して報告している、など	7	5
先行研究の 解釈	2a-3	先行研究の結果からは～が目立つ、Xは～としており～を中心に考えていると思われる、など	6	5
異なる立場 の先行研究 の紹介	2a-2	Xは～と異なる立場をとっている、Xは～に疑問を投げかけている、など	6	2
表の引用元 の提示	2a-2	表1は～についてXを～の点からまとめたものである、など	3	1
先行研究のま とめと研究目 的の提示	3-1	Xは～としているが、本研究では～こととした、Xの議論をふまえて～を明らかにする、など	3	3
その他	1, 2	〈研究行動の予告〉Xの枠組みを援用し～を見る、〈本研究の重視点〉～ために～(X)が重要になる、など	19	7

- ⑦ また、前田（1995）は、ヨウニは従属節と主節の主語が異なる場合にも使用されると指摘している。（福田・稲垣 2013）【先行研究の内容紹介】
- ⑧ 庵・高梨・中西・山田（2001：419）も、接続詞「だって」と共起し、主に女性や子どもが用いるとしており、4冊全てが「正当化」「言い訳」の用法を中心に考えていると思われる。（松下 2014）【先行研究の解釈】
- ⑨ 張（2009）の作文調査では、使用すべき和語動詞を回避し漢語動詞を使用する恐れがあり、また日本語習熟度の違いによる影響も考慮されていない。（森山）【先行研究の評価】

表 6 からわかるように、先行研究の存在や内容の紹介、先行研究の解釈、先行研究の評価など第 2 段階と第 3 段階で引用マーカーが使用されている。このマーカーは先行研究の内容を読み手に伝えることによって、研究対象についてこれまでどのような研究がなされどこまで研究が進んでいるのかを整理して読み手と共有するとともに、先行研究ではまだ明らかにされていない点について読み手の目を向けさせるために使用されているとわかる。

学習者にとって、先行研究の存在紹介や内容紹介に引用マーカーを使用することは理解しやすいだろうが、引用マーカーとともに先行研究の解釈や先行研究の評価を書く用法があるという知識が不足しているために、先行研究の羅列になったり研究目的につながらない書き方になったりする可能性も考えられる。また、譲歩マーカーと共起することも多い点も特徴的であり、この点も学習者に示す必要があるだろう（譲歩マーカーとの共起については 5.2 で詳述する）。

山本（2019）が 4 種の引用・解釈文（山本他 2015）とその機能を把握して引用・解釈による論理展開能力を高める必要があることを指摘しているが、本調査の対象となった論文にはこの 4 種の典型例にあてはまらない引用マーカーも多く、学習者が適切に引用・解釈文を理解し使用できるようになるためには段階的な指導が必要であろう。その第一歩として、2a-2、2a-3、3-1 でそれぞれ使用される典型的な引用マーカーを示すことが、学習者の問題を解決する一つの方法になるのではないと思われる。

5.1.4 内部照応マーカーの使用状況

内部照応マーカーは前方あるいは後方を指すことによりテキスト相互の関係を示すものである。前方照応か後方照応かによって、指す対象や使用表現、また内部照応マーカーの出現する文が異なる。詳細は表7の通りである。

後方照応は、「以下」「次」「ここ」や節番号・項番号を使った表現が使用される。特徴的なのは、「～では～を確認する」「～ことを目標とする」など文構造マーカーと共起している点である。これにより、後続する複数文、図表、後の項あるいは当該項を指示し、項の行動予告、先行研究の内容の提示予告、図表の提示予告、研究課題の提示予告、キーワード定義の提示予告、研究対象の検討予告、先行研究の内容のまとめの提示予告などを行うことができる。情報提示予告のマーカーとしての機能をもつと考えられる。

前方照応は「以上」「上」「さき」や節番号・項番号を使った表現が使用される。「～と考えられる」「不十分である」など譲歩マーカーや評価・態度マーカーと共起する傾向がある。節全体、段落全体、前出の複数文、前出の先行研究などを指示し、先行研究の解釈、研究対象の検討、先行研究の問題点指摘などを行う文で使用される。主に前文脈のまとめを示す機能をもつと考えられる。

表 7 内部照応マーカの使用状況

種類	指示対象	典型的な 出現段階	表現(例)	出現数	使用 者数
後 方 照 応	後の複数文 を指示	2a-2, 4	以下{ の/ に/ の 通 り/ のように}, 次の{ ~点/ のように}	9	6
	図表を指示	2a-3	図/ 表1{ のように/ は}	5	3
	次項を指示	1	【項】では	3	2
	当該項を指 示	1	ここでは	1	1
前 方 照 応	節全体を指 示	2b-2,3-1	以上{ から/ の 先行研 究は/ のように}	3	3
	前出の複数 文を指示	2a-2, 2a-3, 4	以上{ の点/ のような}, 上記の	3	2
	前出の先行 研究を指示	2a-1,2a-3	上述の、さきに触れた	2	2
	段落全体を 指示	2a-3	以上{ の こと から/ の 点から/ を}	3	1
	前項を指示	3	以上のように	1	1
	前節を指示	2b-1	【節】で述べた	1	1

⑩ 2-1 では、本稿で扱う注釈挿入を、舩橋（2011）にもとづき確認する。（舩橋 2013）【次項を指示：項の行動予告】

⑪ 以上の点から総合的に判断して、ヨウニとタメニを比較すると、タメニは「目的」を表す用法としてより典型的であり、ヨウニの目的表現としての典型性はより低いと考えられる。（稲垣・福田 2013）【段落全体を指示：研究対象の検討】

AW 教育においては、後方照応の内部照応マーカ―と文構造マーカ―の使用に

より項全体の行動予告、図表の提示予告、研究課題やキーワードの定義などの予告をして読み手に後続文脈を予測させたり、前方照応の内部照応マーカーと譲歩マーカー、評価・態度マーカーの使用により複数文にわたる説明や検討をまとめて書き手の解釈を述べたり問題点を指摘したりすることで、読み手に対して書き手の意見の箇所を明示することができるという指導につながられる可能性が示唆される。

5.1.5 例示・言い換えマーカーの使用状況

例示・言い換えマーカーとは命題の意味を精緻化し、書き手の伝えたい意味・解釈を読み手に伝えようとするものである。表8の通り、使用者数の多いものから順に、例示、具体化、言い換え、定義、まとめ、留意点、意味解釈、帰結、当該分野の共通認識などの種類がある。

表8 例示・言い換えマーカーの使用状況

種類	典型的な出現段階	表現	出現数	使用者数
例示	2a-2,2b-1	～を例に挙げると、たとえば	7	6
具体化	4-2	具体的には、すなわち	5	5
言い換え	2a-3,2b-1	すなわち～{と考えられる/ のである}、言い換えれば、 つまり～ということである	6	4
定義	2b-1,2b-2	～とは～である、～と定義 する、～を～とする	6	3
まとめ	2a-2,2a-3	以上をまとめると、～を概 観すると	2	2
留意点	2b-1	ただし	2	2
意味解釈	2b-1	～ということは～というこ とを意味する	1	1
帰結	2b-1	すなわち～必要がある	1	1
当該分野の 共通認識	2a-2	いわゆるN	1	1

- ⑫ CNS の語の産出面の研究は少なく、主に作文調査を通して誤用例が収集されている。例えば、張（2009）では、CNS は漢語の知識に依存するあまり「32 人を殺す事件が暴発した」など和語を使うべきところで漢語を用いるという報告がある。（森山 2015）【例示】
- ⑬ 先行研究の結果からは「A も B も P」構文（砂糖も田中も来た）や「A も P, B も P」構文（佐藤も来たし、田中も来た）のような文は、単一の「A も P」構文（佐藤も来た）よりも不使用が目立つ。すなわち、習得が困難であると考えられる。（中俣 2013）【言い換え】

いずれも共通しているのは、前文（または前文脈の複数文）を何のために書いたのかを読み手にわかりやすく説明しようとする文にこのマーカーが使用されている点である。前文が抽象的であれば言い換えや意味解釈など別の表現を使用する方法、または、具体化や例示によって説明するという方法がとられ、前に出現した複数文から何が言えるのかを表すのであれば帰結やまとめを行う。また、語の意味を読み手に的確に把握させるために定義や当該分野の共通認識によって表す、例外があることを示すために留意点を述べる、などの方法もとられる。

このように、例示・言い換えマーカーは、読み手に対して「先行研究の章」の主要な流れの中からある文を取り出し、それについての詳細な情報提供を行うことを示すと同時に、書き手の意図をよりの確に伝えようとすることを読み手に示すものであるといえる。

5.2 Interactional の使用状況

本節では読み手をテキストに関与させる機能をもつ Interactional が「先行研究の章」の中でどのように使用されているかをみる。調査対象論文 15 編における Interactional の出現数と使用者数は、表 9 の通りであった。使用者数が多かったのは譲歩マーカーと評価・態度マーカーであり、出現数も多かった。

表9 Interactional の出現数と使用者数

下位分類	出現数	使用者数
譲歩マーカー	45	14
強調マーカー	23	7
評価・態度マーカー	37	12
一人称マーカー	2	2
関与マーカー	5	3

5.2.1 譲歩マーカーの使用状況

譲歩マーカーは Interactional のの中では最も多く使用されている。山岡他 (2010) が述べているように、アカデミックな主張を行う際に自分の意見のみを書き続けると他者にはどうしてもその意見に対して否定的に理解される傾向があるため、限定性を示したり自分の立場とは異なる意見に言及したりすることで反対意見への配慮を示すことも必要である。そのような配慮を示す方法として譲歩マーカーが使用されていると考えられる。

表10にみられるように「先行研究の章」において譲歩マーカーは3つの用法がある。それは「先行研究に対する否定的内容を提示する」「重要点や必要なことを読み手に明示する」「先行研究に対する解釈を述べる」用法である。以下、典型的な出現段階の早い用法から順に述べる。

表 10 譲歩マーカースの使用状況

用法	典型的な出現段階	種類	表現（例）	出現数	使用者数
先行研究に対する否定的内容の提示	3-1	思考動詞	が考えられる、と考えられる、と感じられる、と思われる、と予測できる、疑問に思われる	11	4
		引用動詞（否定形）	とは言いがたい、とは言えない、と言わざるを得ない	4	4
		副詞・挿入句	あくまでも、やや、まだ、管見の限り	4	4
		可能性を表す表現	可能性も/が否定できない、可能性を払拭できない	3	2
		一定程度に達していない	にとどまっている	2	2
		ダロウ	だろう	1	1
		傾向	傾向が見受けられる	1	1
重要点や必要な点の読み手への明示	3-2	思考動詞	と考えられる、と考えることができる、と推測される、と思われる、と考える	9	6
		ダロウ	可能であろう	1	1
		可能性を表す表現	～得る	1	1
		働きかけ表現	のではなかろうか	1	1
先行研究に対する解釈	2a-3	思考動詞	と考える、と考えることができる、と思われる	3	3
		示唆を表す	を示唆している、示唆が得られる	2	2
		可能表現	が可能になる	2	1
		ダロウ	とも考えられよう	1	1

まず、第 2a-3 段階において先行研究に対する解釈を述べる際に譲歩マーカ―が使用される。帰結やまとめを表す連結マーカ―と共に起る傾向があるのが特徴である。ここでは、先行研究の知見を書き手がどう捉えているかを読み手に示す際に、その書き手の解釈が読み手に受け入れられるよう、譲歩マーカ―によって命題内容に対するコミットメントを保留していることがうかがわれる。具体的には、思考動詞やダロウによって書き手の想像や思考という間接的認識を経た上での判断であることを示す(小森 2018) ことで他の判断もあり得ることを示唆したり、「示唆」を用いた表現により間接的にそう判断されることを示したり、可能表現によって肯定的な結果が見込まれることを示したりするなどの方法がとられている。

- ⑭ 以上の点から総合的に判断して、ヨウニとタメニを比較すると、タメニは「目的」を表す用法としてより典型的であり、ヨウニの目的表現としての典型性はより低いと考えられる。(福田・稲垣 2013)【先行研究に対する解釈】

- ⑮ この実践から、家族の仕事に関わる知識や体験への着目、学校と家庭の連携および親の参加という示唆が得られる。(滑川 2015)【先行研究に対する解釈】

また、3-1 段階において逆接の連結マーカ―「しかし」を伴いつつ、問題点指摘など先行研究に対する否定的内容を提示する文で譲歩マーカ―が使用される。この用法は、否定的な指摘を行うといった読み手とのコンフリクトが生じる可能性が高い言語行為を遂行するために使用されと考えられる。譲歩マーカ―は否定的内容を事実としてではなく意見として提示し、これに対する他の意見もあり得るという選択肢を読み手に与えるものであり (Hyland 2005)、そこに読み手が書き手の主張を受け入れやすくなるような対人的配慮が生まれると考えられる。

文末表現が譲歩マーカ―になるものとしては、思考動詞やダロウの他、「とは言えない」など引用動詞の否定形を付加することによって書き手としては断言できないことを述べる表現や、「と言わざるを得ない」のように消極的な判断であ

ることを示す表現がある。

また、可能性を表す表現も使用される。可能性表現は、山岡（2016）によれば、話者の意思で容易にコントロールできない領域に事象の生起可能性があることを表すため、話者の責任範囲外であるという要素が入っている分、客観性を帯びた表現になるということである。そのため、日本語の可能性表現は、命題内容に対する書き手のコミットメントを保留する譲歩マーカーとして使用されることがわかる。

副詞・挿入句には、「やや」など否定的ニュアンスの程度を弱めるもの、「あくまでも」と対象範囲を狭めてその範囲内であれば妥当であると示す（その範囲外では妥当ではない可能性があることを示唆する）もの、「まだ」と先行研究の今後の発展の可能性を示す（現段階では不十分であることを示唆する）もの、「管見の限り」と自身の調査が十分でない可能性を示すものなどがある。

その他、一定程度に達していないことを表す「とどまっている」、否定的方向に偏りがちであることを示す「傾向がみられる」など、多様な譲歩マーカーによって読み手に配慮しつつ否定的内容を表現している。

- ⑯ しかし、引用者の解釈という視点から考える時、引用動詞か引用動詞以外の述語動詞かの違いは、引用者の解釈程度にかなり違いがあると感じられる。（山本・二通 2015）【先行研究に対する否定的内容の提示】
- ⑰ しかし、中国語話者のデータだけでは、このタメニの過剰般化が母語の影響以外 の何らかの普遍的要因で起こる可能性も否定できない。（福田・稲垣 2013）【先行研究に対する否定的内容の提示】

さらに、第 3-2 段階において、当該論文における重要点や必要な点、当該論文の意義などを「求められる」「必要がある」などの評価・態度マーカーを共起させて読み手に示す譲歩マーカーの用法もみられた。書き手が重要であると考えていることを読み手に受け入れてもらうためには、上述したように読み手から反感を買わないための何らかの手段が必要である。他の用法と同様、思考動詞やダロウ、可能性表現を使用する他、働きかけの表現「のではなかろうか」によって読

み手に共有や賛同を求める（小森 2014）方法もある。これにより、反対意見への配慮を伝え、読み手が書き手の主張を受け入れやすくするという読み手配慮が生まれると考えられる。

- ⑮ それら働きかけの意義を再検討し、具体的な課題提起を行うためには、現場に赴き、日本人介護職員の視点から現状を理解することも求められるのではなかろうか。（上野 2013）【重要点や必要な点の読み手への明示】
- ⑯ しかし山木（2013）も指摘するように、学習者の誤用傾向をつかむためには、学習者の実際の言語運用を調査し、使用状況を把握する必要があると
考えられる。（永井 2015）【重要点や必要な点の読み手への明示】

5.2.3 評価・態度マーカーの使用状況

評価・態度マーカーは Interactional の中では 2 番目に使用数が多い。評価・態度マーカーが多く使われるのは主に第 3 段階であり、「先行研究の問題点の指摘」「明らかにすべき点の提示」「必要な観点の提示」などの用法がある。

表 11 評価・態度マーカーの出現状況

用法	典型的な出現段階	表現（例）	出現数	使用者数
先行研究の問題点の指摘	3-1	にとどまっている、不十分である、十分とは言えない、のみ、難しい、代表しているとはいいがたい	13	6
明らかにすべき点の提示	3-2	必要がある、求められる、必要である	9	5
必要な観点の提示		必要がある、ここで問題となるのは、求められる、必要である	5	4
注目点、留意点の提示	2a-3	この論文で注目するのは、留意すべき	2	2
その他	—	～なければならない、あるべき、重要になる、興味深い、てしまう、が必要	2	1

先行研究の問題点を指摘する表現は否定的判断であることを示す「にとどまっている、不十分である、難しい」などの評価を表す文末表現や形容詞の他、「のみ」など助詞によるものもある。これらは、3-1 段階で譲歩マーカールとともに使用されることで、書き手の否定的判断が読み手に受け入れられやすくなると思われる。

明らかにすべき点の提示には「必要がある、必要である、求められる」が使用され、必要な観点の提示も「必要がある、必要である、求められる、ここで問題となるのは」など使用される表現はほぼ重複していた。3-2 段階において書き手が重視したいポイントを読み手に注目させるという目的で、これらの評価・態度マーカールが用いられると考えられる。

- ㉑ しかし、調査の手法に関しては、正誤判断テストであり受容的な側面が強く、正しい日本語であるか否かの判断はできても、中国語からの転移と断定するのは難しいだろう。（森山 2015）【先行研究の問題点の指摘】
- ㉒ 個々の学生のニーズに応じたより適切で効果的な支援が行えるようにするためには、広域な専門分野をカバーする論文構造の類型を提示し、その状況を明らかにすることが必要である。（佐藤他 2013）【明らかにすべき点の提示】
- ㉓ しかし、ここで問題となるのはジャンルが獲得されたかどうかをどのように判断するのかということである。（大平 2015）【必要な観点の提示】

以上述べてきたように、Interactional は書き手の主張を読み手に受け入れてもらうための配慮を示す表現である。注目ポイントを明示する評価・態度マーカールに加え、命題内容に対する書き手のコミットメントを保留して読み手とのコンフリクトを避ける譲歩マーカールの機能を積極的に AW 教育で伝える必要があるのではないだろうか。

5.3 総合考察

5.1 と 5.2 の分析を *Interactive* と *Interactional* に分けて考察する。

まず、*Interactive* について述べる。「先行研究の章」ではすべての種類の *Interactive* が多用されているが、これらは論文の一貫性を支えているとみられる。AW の一貫性については小森・内藤 (2015) が①題目と見出しが内容を過不足なく表している、②序論・本論・結論で述べた内容が各内部あるいは部分間で齟齬がない、③全体を通して主張から逸脱していない、④設定したテーマの範囲を伸縮していない、⑤主張に関わる語彙・文型が一貫して使われているものと定義している。これを踏まえて、各段階の *Interactive* を見ていく。

まず、第1段階では、内部照応マーカーと文構造マーカーが「先行研究の章」の内容を予告する。予告通りに当該章が書かれていれば一貫性の定義の②を満たすことになり、読み手は「先行研究の章」内の一貫性を確認することができる。第2段階では先行研究の検討を行う。引用マーカーに共起する追加・対比の連結マーカーが複数の先行研究の羅列にならないよう相互の関係を示し、章内部の構造を成立させている。また、文構造マーカーと引用マーカー/内部照応マーカーの組み合わせにより研究対象の範囲や定義の詳細な設定を行う。論文を読む前提知識を読み手と共有し、読み手がこれを議論の土台にして、論文内でのキーワードが一貫して使用されているか等を確認しつつ論文全体を読み進めことに寄与するもので、一貫性の定義の④や⑤を支えるものであると考えられる。第3段階では逆接の連結マーカーが段階の移行を示した上で第2段階の内容に対する書き手の評価、すなわち先行研究の問題点を述べる。そして、第4段階への移行を表す順接の連結マーカーとともに、先行研究の問題点の解決方法が研究目的として提示される。この研究目的は文構造マーカーによって示され、さらに、書き手の当該論文における研究行動を精緻化するために言い換え・例示マーカーや内部照応マーカーが使用されている。そして、この研究目的への答えが最終的には論文の結論部で「～が明らかになった」「～が確認された」「～がわかった」などの表現によって述べられる。つまり、第4段階は一貫性の定義の②と③を満たすための要素となっていることがわかる。

一方、「先行研究の章」における *Interactional* は譲歩マーカーと評価・態度マー

カーの使用が多く見られた。これらは書き手の主張を読み手に受け入れられるようにするための効果がある、いわば読み手配慮の表現であると考えられる。それぞれ、出現段階によって、使用マーカーと共起表現に特徴がある。

まず、2a-3 段階で先行研究の解釈を述べ、先行研究の知見をどう捉えればよいのかという論文の前提知識を読み手と共有するが、ここでは帰結やまとめを表す連結マーカーとともに、思考動詞や「示唆」を伴った譲歩マーカーが使用される。次に、3-1 段階では逆接の連結マーカー「しかし」と共に、先行研究に対する問題点指摘を思考動詞、引用動詞、副詞・挿入句といった様々な譲歩マーカーが担う。否定的内容の提示は読み手とのコンフリクトを避けて効果的に述べなければならない、ここでの譲歩マーカーの豊かなバリエーションを学習者に提示する必要があるだろう。3-2 段階では、評価・態度マーカーとともに思考動詞が譲歩マーカーとして使用され、注目すべき点に読み手の目を向けさせ、論文の意義や読む必要性を認識させることで、読み手が積極的に論文を読むよう促す役割を果たしていると思われる。

表 12 「先行研究の章」の MD の役割と表現

段階	カテゴリー	論文全体の構成におけるMDの役割	MD[使用例]
第1段階 当該章の 行動予告		Interactive: 章内の一貫性を支える	内部照応＋文構造マーカー 【項】では～について述べる]
第2段階 先行研究 の検討	先行研究の 紹介 ・存在紹介 ・内容紹介 研究対象の 説明・検討	Interactive: 先行研究相互の関係の 提示	引用マーカー [～に関する先行研究にはXが ある][Xは～としている] 連結マーカー [また～][他にも～] [一方～][しかしその一方で～]
	先行研究の 解釈	Interactional: 前提知識の共有	引用＋譲歩マーカー、連結/内 部照応＋譲歩マーカー [Xは～と思われる][以上から、 ～が示唆される]
	研究対象の 定義	Interactive: 論文全体の一貫性を支 える	引用＋文構造マーカー、内部照 応＋文構造マーカー [本研究ではXの定義を参照し ～とする][本研究では～を次の ように定義する]
第3段階 先行研究 の評価	先行研究の 問題点指摘	Interactive: 段階の移行の提示	連結(+引用)＋評価・態度＋譲 歩マーカー [しかし、～と考えられる][し かし、～が必要であると思われ る]
	研究の意義 説明	Interactional: 積極的な読みの促し	
第4段階 研究目的 の提示	研究目的の 提示	Interactive: 段階の移行の提示 論文の結論部への関係 づけ	連結＋文構造マーカー [そこで本研究では～を検証す る]
	研究課題の 提示	研究行動の精緻化	言い換え・例示＋内部照応＋文 構造マーカー [具体的には次の～点を研究課 題とする]

6. まとめと今後の課題

本稿では、学習者の AW における先行研究の扱いに関する問題点は、その位置づけについての理解が不明確であることや、各段階の位置づけをどう日本語で表現するのかについての知識が不足しているためであると考え、その位置づけと表現方法を MD という観点からみてきた。

位置づけについては、論文を読むための前提知識を読み手と共有し、読み手による積極的な読みの促しを行うのがこの「先行研究の章」であることが示唆された。また、表現については、Interactive が論文の一貫性を支える要素となっていくことと、Interactional によって書き手の解釈や評価を読み手に受け入れられやすくなるような配慮が示されることが示唆された。

この結果を日本語教育の現場に生かすとすれば、まずは 2a-2、2a-3、3-1、4-1 などの必須段階において典型的に出現する Interactive と、注目すべきポイントを示す評価・態度マーカー、そして、読み手への配慮を示すためのバリエーション豊かな譲歩マーカーを学習者に提示することが、「先行研究の章」の作成の一助になるのではないかと考える。

本研究の対象は、人文科学系学術論文の中でも日本語教育の分野に関する論文であったが、分野が異なれば MD の使用も異なる可能性がある。今後は他の分野についても使用状況を調査したいと考えている。

参考文献

- 石黒圭（2012）「論文の書き方―査読者との対話としての投稿―」『専門日本語教育研究』14 pp.3-10
- 石黒圭（2017）「読解研究から見た『文の姿勢の研究』」庵功雄・石黒圭・丸山岳彦 編『時間の流れと文章の組み立て―林言語学の再解釈』ひつじ書房 pp.93-113
- 大島弥生（2009）「社会科学系の事例・史料にもとづく研究論文における論証の談話分析」『専門日本語教育研究』11 pp.15-22
- 大島弥生（2019）「人文社会科学系の資料分析型論文の指導のための試案」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』11 pp.64-72
- 大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子・二通信子（2010）「学術論文の導入部分における展開の型の分野横断的比較研究」『専門日本語教育研究』12 pp.27-34

- 小島ますみ (2017) 「ディベートやアカデミック・ライティング指導をとおしたメタディスコース指導効果の検証」『中部地区英語教育学会紀要』46 pp.293-303
- 小森万里 (2014) 「アカデミック・ライティングにおける「(の) ではないか」の使われ方に関する一考察」『日本語・日本文化』41 pp.37-60
- 小森万里 (2018) 「日本語母語話者と日本語学習者の意見文におけるダロウの使用状況」『日本語／日本語教育研究』9 pp.151-166
- 小森万里 (2020) 「人文科学系学術論文の冒頭章におけるメタディスコース—内容・構成面と言語面とのつながりを意識したライティング教育に向けて—」『日本語・日本文化』47 pp.49-65
- 小森万里・内藤真理子 (2015) 「アカデミック・ライティングにおける一貫性とは—学習者・教員双方がレポート評価に利用できるチェックリストの提案—」『日本語／日本語教育研究』6 pp.205-220
- 佐藤勢紀子、大島弥生、二通信子、山本富美子、因京子、山路奈保子 (2013) 「学術論文の構造型とその分布：人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に」『日本語教育』154 pp.85-99
- 田中真理・阿部新 (2014) 『Good Writing へのパスポート—読み手と構成を意識した日本語ライティング—』くろしお出版
- 田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里 (1998) 「第二言語としての日本語における作文評価—「いい」作文の決定要因」『日本語教育』99 pp.60-71
- 坪根由香里・田中真理 (2015) 「第二言語としての日本語小論文における「いい内容」「いい構成」を探る—評価観の共通点・相違点から—」『社会言語科学』18 (1) pp.111-127
- 内藤真理子・小森万里 (2016) 「アカデミック・ライティングにおける重複がもたらす冗長性を回避するための方策—卓立性・結束性・論理性・一貫性の観点からの分析—」『日本語教育』164 pp.1-16
- 中谷安男 (2019) 「経済・経営国際ジャーナル論文のイントロダクションのコーパス分析—メタディスコースなどによるムーヴ構築方法の検証—」『経済志林』86 (3・4) pp.207-230
- 中村かおり・向井留実子・近藤裕子 (2019) 「専門分野に即した引用方法の理解を促す活動の試み」『日本語教育方法研究会誌』25 (2) pp.26-27
- 生天目知美・大島弥生 (2018) 「資料分析型論文の史料引用における引用・解釈表現の特徴—歴史学／国際政治学／地域研究を対象に—」『専門日本語教育研究』20 pp.19-26
- 山岡政紀 (2016) 『『カモシレナイ』における可能性判断と対人配慮』小野正樹・李奇楠 編『言語の主観性—認知とポライトネスの接点』くろしお出版 pp.133-150
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』明治書院

- 山本富美子 (2016) 「論文の『意図的ではない剽窃』の問題— モダリティの混同と解釈の
ない引用—」『Global Communication』6 pp.117-132
- 山本富美子・二通信子 (2015) 「論文の引用・解釈構造—人文・社会科学系論文指導のため
の基礎的研究—」『日本語教育』160 pp.94-109
- 楊秀娥 (2017) 「日本語学習者の引用使用の実態調査—中国国内における日本語専攻課程の
学部生の卒業論文を対象に—」『専門日本語教育研究』19 pp.57-62
- Hyland, K. (1996) Nurturing Hedges in the ESP Curriculum, *System*, Vol.24, pp.477-490
- Hyland, K. (1998) Persuasion and Context: The Pragmatics of Academic Metadiscourse, *Journal of
Pragmatics*, Vol.30, pp.437-455
- Hyland, K. (2005) *Metadiscourse*, Continuum, New York
- 学会名鑑 <http://gakkai.jst.go.jp/gakkai/> (2021 年 1 月 22 日参照)

調査対象論文

- 葦原恭子・小野塚若菜 (2014) 「高度外国人材のビジネス日本語能力を評価するシステムと
してのビジネス日本語 Can-do statements の開発—BJT ビジネス日本語能力テストの測
定対象能力に基づいて—」『日本語教育』157 pp.1-16
- 上野美香 (2013) 「介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題—日本
人介護職員の視点からの分析と課題提起—」『日本語教育』156 pp.1-15
- 大平幸 (2015) 「専門用語が生活において意味のあることばになっていく過程—ジャンルの
獲得という視点からの分析—」『日本語教育』160 pp.79-93
- 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子 (2013) 「学術論文
の構造型とその分布—人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に—」『日本語教育』
154 pp.85-99
- 関崎博紀 (2013) 「日本人大学生同士の雑談に見られる否定的評価の言語的表現方法に関す
る一考察」『日本語教育』155 pp.111-125
- 永井絢子 (2015) 「スリランカ人日本語学習者の格助詞の習得—シンハラ語母語話者の作文
に見られる「ガ」を中心に—」『日本語教育』161 pp.31-41
- 中俣尚己 (2013) 「中国語話者による『も』構文の習得—『A も B も P』『A も P、B も P』
構文に注目して—」『日本語教育』156 pp.16-30
- 滑川恵理子 (2015) 「言語少数派の子どもの生活体験に裏打ちされた概念学習—身近な大人
との母語と日本語とのやり取りから—」『日本語教育』160 pp.49-63
- 西川朋美・青木由香・細野尚子・樋口万喜子 (2015) 「日本生まれ・育ちの JSL の子ども
の日本語力—和語動詞の産出におけるモノリンガルとの差異—」『日本語教育』160
pp.64-78

- 福田純也・稲垣俊史 (2013) 「上級日本語学習者による目的を表す「ために」と「ように」の習得—『ために』の過剰般化は中国語話者に特有か—」『日本語教育』156 pp.31-44
- 船橋瑞貴 (2013) 「注釈挿入における発話構造の有標化一言語形式以外のリソース使用に注目して—」『日本語教育』155 pp.126-141
- 松下光宏 (2014) 「コミュニケーションのための終助詞『もの』の用法—母語話者と非母語話者の使用実態から—」『日本語教育』159 pp.30-45
- 森山仁美 (2015) 「文脈における和語動詞語彙の産出—中国語母語話者のケース—」『日本語教育』161 pp.2-14
- 山田智久 (2014) 「教師のビリーフの変化要因についての考察—二名の日本語教師へのPAC 分析調査結果の比較から—」『日本語教育』157 pp.32-46
- 山本富美子・二通信子 (2015) 「論文の引用・解釈構造—人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究—」『日本語教育』160 pp.94-109

〈キーワード〉 人文科学系論文 先行研究の章 メタディスコース 結束性 読み手配慮

Metadiscourse in the Chapters on Previous Research of Academic Papers in Humanities

KOMORI Mari

The treatment of previous research in academic writing is important. However, it is difficult for even advanced Japanese learners to do so appropriately. The following are a few examples of learners' difficulties: (1) only enumerating previous studies; (2) no evaluation of previous studies by writers; (3) unmatching the description of previous research and the actual research content; and (4) no expressions of the relationship between the previous research and the research purpose. These problems may arise because learners do not understand how the write-up of previous research contributes to the whole paper, or even if they understand its importance, they cannot effectively accomplish the task in Japanese.

Therefore, to enhance academic writing education for Japanese learners, this study investigated the role and usage expressions of chapters on previous research by native Japanese speakers from the viewpoint of metadiscourse.

The results suggested that the role of chapters on previous research is to share the prerequisite knowledge with readers and encourage them to read papers actively. Further, regarding the expression, the result suggested that interactive metadiscourse supports the coherence of the papers and that interactional metadiscourse makes the writers' interpretation and evaluation more acceptable to the readers.

Keywords: Academic Papers in Humanities, Chapters on Previous Research, Metadiscourse, Coherence, Consideration for Reader